

---

# 十六夜の時のアリス

まな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十六夜の時のアリス

### 【Nコード】

N8054A

### 【作者名】

まな

### 【あらすじ】

僕のアリス。さあ、戦おう。月がその姿を見せるのを躊躇う空間に選ばれた少女、アリスは自らの意思に反して刀を振る。全ては千の血を十六夜の月に捧げる為。今、少女の戦いが始まった…。

## 零夜 僕のアリス（前書き）

この小説は流血描写が有ります。なるべく少なくしようとは思いますが、苦手な方はご注意ください。

## 零夜 僕のアリス

ねえ、アリス。何で僕を拒むの？

ねっとりとした少年とも少女とも言えない声が私に絡み付く。

私はそれに気味の悪さを覚え、逃げ続ける。この声に飲まれてはいけない。そんな危機感すらあった。

声は絶えず私を追う。

アリス、アリス。僕の、僕だけの可愛いアリス。僕を受け入れて。

足が痛い。これ以上走れない、限界だと足は訴える。

駄目。立ち止まったら、駄目！

私は弱音を吐く足を叱咤して、暗闇の中を駆け続ける。光一つ無い孤独な空間。風すらも吹かず、闇は広がる。

アリス！ さあ、僕を求めて！ 僕は猫！ 君だけの、君の為の！

私の右手が、熱を帯びた。声に握られたのだ。

未知の恐怖に私は悲鳴を上げた。

私の中の血が逆流し、細胞の一つ一つが作り替えられていく。

僕の可愛いアリス。……さあ、戦おう。千の血を君に捧げよう

声は嬉しいそうに私に囁いた。

## 二夜 加藤有栖とその日常

「あー……ん！……もうっ……やん！ 加藤有栖さんっ！」  
「ヤバイー！」

「はいっ、先生寝てません！」

勢いよく私は垂れ下がった頭を振り上げた。必死で言い訳を叫びながら。

先生の雷が落ちるのが怖い訳じゃなくて、クラスメートの呆れた視線が怖いのだ。なんせ、この奏晏<sup>そうあん</sup>高校は進学校として、世間にアピールしている。その為、通う生徒らもその自覚を持っている人が多い。特に中本とか三浦とか遠藤さんとか……。

一人焦っているのと、予想に反して教室内が暗い事に気付く。ついでに横からはクスクスと笑い声が。

「もう、あーちゃんってば。帰りのホームルームを無事終わらせた事忘れてるの？」

地毛である少し茶色かったセミロングの髪を揺らしながら、小柄な友人は笑う。

「みつちゃん……。ひどっ」

恨みがましい私の声に耐えられなくなったのか、ついに彼女中島幹子は大笑いをする。……そこまで笑わなくてもいいんじゃない？

「ふふ、ご、ごめん……。ふふ、うふふ」

「謝罪になってないし」

愚痴をこぼしながら、私は机の横にかけていた鞆に手をかけた。ズッシリと、今日一日分の学習の重みを感じた。

途端、鞆を握る私の右手に激痛が走った。

「……っ」

思わず鞆を落とす。幸い、止め具がしっかり止まっていた為、中身はばら蒔けずに済んだ。

「大丈夫!？」

みつちゃんが私の右手に触れる。

「ねえ、ちよつと熱持つてるよ!」

心配そうな声に私は無理矢理笑って誤魔化す。

「大丈夫大丈夫。たぶん枕代わりにしてたから、痺れただけだよ」

「でも……」

それでも心配そうな視線を送るみつちゃんの前で私はヒラヒラと右手を振る。

「ほら、平気平気」

みつちゃんはまだ不安そうな顔してるが、少し納得したようだ。

「ごめんね。ちよつと遅くなっちゃって」

「あー、いいよ。部活どだった?」

左手で鞆を拾いつつ、聞いてみる。たぶん予想通りの言葉が返ってくると思う。

私の問いに、みつちゃんの頬は赤く染まる。ああ、やっぱり。

「もう、三橋先輩カッコよすぎ!!」

体を震わせ、細い瞳を輝かせながら、みつちゃんは今日の部活を語ってくれた。いや、正しくは三橋先輩を、だな。

「……でねでね、先輩ってば、甘い物が好きなんだって」

「は、意外だね。あの三橋先輩が」

三橋先輩は我が妻晏高校バスケット部のホープとか言われている、結構な有名人だ。おまけに顔も性格も良い部類に入るので、割りとモテてるらしい。

みつちゃんは元々バスケットが好きで、女子バスケット部に在籍していた。最初の内はバスケット部の話だったのだが、いつからか三橋先輩の話に変わっていった。最近では、男子バスケット部のマネージャーみたいな仕事も進んで手伝っているんだそう。でね、来週の水曜、三橋先輩の誕生日なの。だから、ファルゼンのケーキを買ってプレゼントしようかな、なんて」

「いいね、あそこのケーキ美味しいし。てか、私が欲しいし」

「ふふ、そう言えば三橋先輩達、あーちゃんの事知ってたよ」  
突然予想外の事を言われ、私の足は止まる。

「……………何で？」

「ん〜とね、四月の実力テストの結果、廊下に張り出されてたじゃん。それで、変わった名前の子がいるな〜って」

親友の間延びした声と返答に脱力する。そして思う。

またか。

「もう、あーちゃん。暗い顔しないの。可愛いじゃん、有栖って名前」

「嫌なの、それが」

父の名前は加藤孝、母は裕子。旧姓は木村。

平凡な名前の二人はせめて、子供にはありふれて無い名前にしようとして決意しました。

加藤有栖。

ふざけすぎだろ。

何だよ、その平凡と非凡のミスマッチ。

おかげで自己紹介すれば本名ですか？ と聞かれ、呼び出しければ笑う失礼な奴までいる。

ついでにわざわざ隣の校舎まで、私の顔を見に来る物好きまでいた。

非凡なぞいらん。平凡万歳。

「あーちゃん、顔。負のオーラが出てる」

「みつちゃんはいいな〜。幹子なんて響きもいいし。字も分かりやすいし。私なんかどーせ習字すりゃ、栖の字が潰れますよう」

ひがみっぽく呟く私の肩をみつちゃんは軽く叩いて、慰めてくれた。だが、目がすごく慈しむような視線を送ってくるんですけどっ。

「大丈夫。あーちゃんにはいい所がいっぱいあるから」

「……………ありがとう」

どこかの外れな言葉をかける親友に投遣りな礼を返す。

そんなこんなやってる内に学校から放れ、バス停を目指して夕飯

の買い出しに賑わう商店街を歩く。

突然、みつちゃんが呟く。

「あ、稲葉君だ」

私も気付いた。

クラスメートの稲葉志郎だ。

制服の紺色のブレザーをだらしなく着て、赤く染めた髪はボサボサのまま。刺されそうな鋭い目はこっちに気付いて無い。……加え煙草は止めなよ。人に当たったら危ないっての。

「今日、サボりだったんだね」

「いつもじゃん。あ、ゲーセン入ってた」

サボるなら制服着なきゃいいのに。悪ぶってるけど、奏晏の生徒ですってアピールしたいのかな。

「稲葉君って、中学までは普通だったよね」

「普通ってか、頭良くて金持ちで顔良しで名前普通の人生の勝ち組だったね」

「……名前関係無いと思うけど。どうしたんだろね。急にあんなになっちゃって」

稲葉は、どちらかと言えば物静かな少年だった。小、中学との腐れ縁で二度三度話しただけの仲だった。

だから、少しだけ高校に入った後の稲葉の変貌が気にはなっていた。けど、それだけだ。

「あ、バス来た」

みつちゃんの声に私は稲葉の事をあっさり忘れた。



## 参夜 遊技への証

走る。走る。

私は走る。

『それ』から逃げるため。  
暗い湿った道を、駆け続ける。

僕を呼んで、アリス。

嫌。

私の中から響く声を拒否する。だけでも声は諦めない。

アリス。僕は君の『モノ』。君は僕らの『モノ』。

声の囁きは優しく、甘い。

私はそれが怖い。

声を受け入れたら、それはもう『私』では無い。

アリス。君が選ばれたんだ。

私の足に、ヌメヌメした触手のような物が絡み付く。その反動で、私はこけてしまった。

長い舌に巻き付かれたような感触。その気持ち悪さに、私は悲鳴を上げた。

自分の叫びと、全身に響く痛み。  
膝から温かい血が流れる。

生暖かい唾液のような汁は腐った魚のような臭いがした。

嫌だ！ 嫌、いやあ！

私はその場で動けなくなる。

アリス、僕を呼んで。

声は再び私を急かす。

今度は少し焦った声で。

その間にも、舌は私を引きずる。

私を……『喰べる』ために。

お願い。アリス！

「助けて！ 私の『猫』！」

途端、白い光が辺りを消し去った。

「……………ッあ」

寒さに目を冷ませば、夜中になっていた。

机に広げっぱなしのノート。眠気に負けたシャーペンのクニヤクニヤした跡。

今は……二時か。

そろそろ寝よう。

私は付けっぱなしの電気スタンドに手を伸ばし、固まった。

「なに、これ」

私の右手の甲。

そこには、血の塊のような線が三つも浮き上がっていた。

スタンドの光を受け、『それ』は宝石のように輝く。

赤い紅い、命の『イシ』。

さあ、アリス。ゲームの始まりだよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8054a/>

---

十六夜の時のアリス

2010年10月11日20時19分発行